

7月4日以来、久々の淀川水系流域委員会が開かれる。その間流域委員会が活動していなかったわけではない。現地視察、学習会などを含めて多くの検討会が、非公開で開催されていたのだ。できるならば、それらも公開してもらいたかったが、一応流域委員会の事情も考えると難しいのもわかってしまう。できるだけ公平に周知し、参加できるように開催しようとするほど、費用も手間もかかる。すべて公開でやろうとすれば、十分な検討時間を、迅速に密に取ることができなくなる。ほぼ6年近く委員会が悩んできた課題だ。公開されない文句は他の人がいっぱい言ってくれるだろうから、私は、少し別のことを述べたい。

準備委員会を含めて6年以上のあいだ、淀川水系流域委員会は「新たな河川整備計画策定のモデルとなり得るのか」を絶えず問われてきた。第一期の4年間、何度も「意見を出しても何の対応もない。無視するつもりか」と言われ、傍聴者からは「何度足を運んで発言しても、聞きっぱなしだ」と批判され、傍聴者も委員と同じ資料を配布するから「次の開催予定のすべてを公開しろ」と言われ、公開できない理由をいちいち説明せねばならず、特に、提言や意見書作成の前に、厳しいスケジュールのため、どうしても非公開のワーキングなどが増えると「公開しろ」「信じてほしい」の押し問答。私も住民運動をやってきた人間として、傍聴者の気持ちは痛いほどわかる。けれども委員会の内情も知る者としては「委員も河川管理者も庶務も、本当に真剣にやっている。わかってもらえればいいのに」と思ってきた。

住民への情報提供や意見聴取にとっても熱心に取り組んでいる若い河川管理者が「どうして住民の人たちは、ああまで疑心暗鬼なのか。始めから疑われては対話が成り立たない」と嘆くと、ある住民参加部会の委員が諭しておられた。「今まで行政と戦ってきた住民の人たちは、行政に殴られ痛い目にあってきたのだ。殴られた痛みは、そうそう忘れられるものではない。住民参加に協力してもらいたかったら、河川管理者はまず『ごめんなさい』と言ってから対話を始めるしかない」と。本当に、全国の河川管理者にはこのような謙虚な気持ちを持ってもらいたいものだ。

今回、公開の流域委員会が3か月も開かれないうち、住民のおもてだった批判をまったく聞かなかった。あれほど委員会を監視し続けていた住民団体の面々が、委員会の検討の

結果を黙って静観したのだ。「委員会は、決して考えをぶれさせず真剣に検討を続けている」と信頼していなければ、ありえない事態だ。すごいことじゃない？委員会を中心にして、河川管理者と住民のあいだに、ついに信頼関係が築けたのだ。苦節6年、やっと淀川水系流域委員会と河川管理者の努力が実ったのだ。それには、住民団体がわの「信じよう。信じたい」という努力も大切だった。淀川水系流域委員会に関わったみんなの努力を讃えたい。

しかし、まだ河川管理者は河川整備計画どころか、整備計画案でさえも発表していない。道のりはまだ半ばでしかない。ここまでみんなでやっと築いた信頼関係は、いつ壊れるかわからないのだ。特に河川管理者は、委員会に意見書を出させるばかりで、去年「5ダムについての方針」を発表して以来、委員会に対して何も答えていない。

整備計画の策定のためには、住民参加が不可欠だ。河川管理者は時々「サイレント・マジョリティの考えを聞きたい。どうすれば知ることができるのか？」と言う。多くの人に意見を聞けば、傍聴者とは違う考えが聞けると思っているようだ。私は「自分で情報を手に入れ問題意識を持ち、自分から足を運んで発言してくれる人たちを、一部の偏った考えの人間だと思うのは、甘いぜ」と思う。サイレント・マジョリティは、情報がないか少ないかで、問題意識が乏しい人たちだ。問題意識を持つ能力がないわけではない。適切な情報さえ与えれば、行政の説明を鵜呑みにせず自分で判断することができる人たちだ。

滋賀県の新幹線新駅問題がよい例だ。7月の滋賀県知事選で争点になって以来、連日マスコミが取りあげ始めた。最初は「新幹線新駅」と報道されていたのに、今は子どもでも「栗東」という地名と「もったいない」を知っている。そして、関西中の人間が「この計画には無理がある」と思っている。こんなふうに、周知されたとたんに問題意識が生まれ、一つの方向に大勢が傾くのがサイレント・マジョリティだ。最初から問題意識を持った人たちの意見は、何かのきっかけで一気に多数の意見になる可能性があるのだ。だからこそ淀川水系流域委員会は、できるかぎり会議を公開し、傍聴者意見を聞き続けなくてはいいけない。河川管理者は、傍聴者意見を含め、委員会の議論を謙虚に聞いてほしい。行政に都合のいいサイレント・マジョリティの存在など幻想せずに。

流域委員会裏話【7】 ハイブリッド堤防実現の夢

私は下流の住民だから、整備計画の第一稿に「堤防強化」が入ったときはうれしかった。しかし、その強化の工法は新しい河川整備になじまない気がした。それで今本先生に「他の方法はないのですか？」と質問した。先生は、喫茶店の紙ナフキンに図を描いて「ある。ハイブリッド堤防といって、堤防に芯を入れる方法だ」と教えてくださった。私は「それだ!!」と思って、ハイブリッド堤防に夢中になった。水工技術研究会で発行した本も読んだ。私が「私の地元にはハイブリッド堤防が必要だ」というと、河川管理者の人たちはいろいろできな

い理由を説明してくれる。そのどれも「じゃあ、しょうがないな」と納得する気になれない。先日は、河川堤防のとても有名な先生の論文も読んだけど、やっぱり納得できなかった。逆に聞きたい。「私の町のこの場所をハイブリッド以外の方法で強化する方法があるなら教えてほしい」と。どこでもハイブリッドにしるというのはない。私の町は輪中堤の中だ。越水破堤を起こせば大災害だ。なのに、他より低く真っ先に越水する場所がある。そこにハイブリッドで越水対策をするのが、命をかけても実現したい私の夢だ。